

ハイ デイ

(第二十二回)

津 田 芳 雄 譯

二十、お手紙

五月になつた。峯々からは春の水が谷々に注ぎ込み、青々とした山の上には、あたたかい晴れた日の光りが照り輝いてゐた。一等おしまひの雪も消えてしまひ、日の光りに、澤山の花が草の上へ首をもたげて來た。山の上ではさわやかな春風が椈の木の枝を吹き抜け、古い葉つばを落して新芽をかざり、もつみ高い所では、大きな鳥が青空に輪を急がいて飛びまはつてゐた。

山の上のおぢいさんの小屋にもお日様はキラキラミ照らし、あたりの地面も雪がすっかり乾いてゐた。ハイデイは又ここに歸つて來て、大よろこびであちこちミ跳ねまはつてゐた。時々急に立ち止まつて、峯々を吹きわたつて來るものさびた深

い風の音に耳をすまし、それが椈の木に吹きつけて、枝をたわめ、幹をゆすつて鱗波きの聲をあげてゐるのを見てゐるミ、ハイデイはからだが小さくて羽のやうに吹き飛ばされながらも、うれしくなつて、こころゆくまでこの歌に聲を合はせて叫ばないではゐられないやうな氣がするのだつた。

それから又小屋の前に走つて行つて日なたに坐り、生えかけの草の中から花がいくつ咲いたかミ、かがみ込んで探すのだつた。數しれぬ小さな甲蟲やそのほかの羽蟲が、這つたり躍つたりしてゐるミ、一緒になつて跳ねまはり、新しい土の香りを胸一ぱいに吸ひ込んで、お山がせんよりにかつみきれいになつたミ思ふのだつた。まはりに飛んでゐる蟲たちも、きつみおんなじ位うれしいのだらうミ思ひ、ハイデイにはその蟲たちのぶん

ぶんうなつてゐる聲が、「やまのうへ、やまのうへ」ミ小さな聲で歌つてゐるやうに聞えた。

裏の物置きの方からは、鋸や鉋の音が聞えて来た。それは一番はじめここに来た時からの馴染深い音なので、ハイディはなつかしさうに耳を傾けた。するそ急に、おぢいさんが何をこさへてゐるのか見たくなつて、飛んで行つた。物置きの戸の前には、もうちやんミ出来上つた椅子が一脚おいてあり、おぢいさんは器用な手付きで、二脚目を作つてゐるミころだつた。

「わかつたわ、これフランクフルトからお客さまがいらした時に使ふのね。これがおばあさまので、今こさへてるのがクララのね。それから、——それから、ほら、もう一つ要るのぢやなくつて?」

ハイディは口ごもりながら、つづけた。

「——ねえ、おぢいさん、でもロッテンマイアさんは、たいてい來ないわねえ」

「さうぢやなあ、わしには何ミも云へんが、まあ拵へミいた方が、安心は安心ぢやなあ」

ハイディは、腕のよりかかりもない粗末なその椅子をしばらくちづつ見つめて、ロッテンマイア

さんミこんな椅子が、似合ふかしらミ考へた。大分考へてるたが、頭を振つて云つた。

「おぢいさん、わたし、ロッテンマイアさんは、

こんな椅子には掛けないミ思ふわ」

「それぢや、きれいな青い芝生の羽根ぶさんの寝椅子にでも案内するさ」

ハイディが何のこミかしらミ考へ込んでゐるミ、上の方から口笛ミざわめきが聞えて來た。すぐハイディは聞き知つて、走つて行つた。見る見る四本足のお友達に取り圍まれてしまつた。山羊たちも、ハイディミ同じ位、春になつて又山の上のぼつて來たこミを、うれしがつてゐるやうだつた。てんでに、跳びまはつたり、うれしさうに啼き立てたり、ハイディをあつちこつちミ押しやつたり、さうにかしてこの悦びを表はさうミ、甘つたれるのだつた。ペーテルはそれを追ひ拂つて、やつミハイディの傍にやつて來て、

「ほら」ミ一通の手紙をわたした。

「まあ、山の上で誰かがこれをあなたに渡したの?」

ハイディはペーテルが何の説明もしないので、わけがわからず、びつくりしてたづねた。

「ううん」

「ぢや、ここから持つて来たの？」

「お辨當袋に這入つてたんだ」

——それも、まんざらの出たらめではないのだつた。ハイディ宛ての手紙を、昨夜ペーテルはデルフリ郵便屋さんから頼まれて、空つぽのお辨當袋に入れておいた。その上へ今朝バンミチーズを押し込んだので、おぢいさんの二匹の山羊を連れに来た時も、すっかり忘れてゐた。おひるにバンミチーズを食べてしまひ、もうかけらでも残つてゐるやしないかミ底を探した時、やつこその手紙を見つけたのだつた。ハイディは注意深く宛名を讀むと、大よろこびで物置きへ駆けもぎつて、おぢいさんにお手紙を差し出した。

「フランクフルトから来たのよ！ クララからなのよ！ 讀んでみませうか」

おぢいさんは悦んで聞いた。ペーテルもついて来て、物置きの柱にもたれ、後によりかかりがある方が、意味がよく聞き取れるやうな氣がして、熱心に耳を傾けてゐた。

大好きなハイディちゃん

用意はもうすつかり出来て、もう二三日して

お父さまさへいらつしやれるやうになれば、すぐに出發するのよ。でもお父さまは、あたしたちと一緒にやなくて、はじめバリにお寄りになるの。お醫者様は毎日いらしつて、お部屋へ這入るなり、「さあ、早く山へいらつしやい、出来るだけ早く」もいつも仰しやるの。早く行かせたくつて、待ち切れないやうよ。お山であなたに暮らしたのが、とてもとても楽しかつたのでつて。この冬ぢう、おほかた毎日くらゐうちへ見えて、その度毎に、「もう一べんお話ししてあげませうね」も云つては、あなたやおぢいさんと一緒に遊んだことや、お山や、お花や、人里離れたしづけさや、さわやかな空氣のお話をして、それからきまつて、「あそこには、丈夫にならないぢやゐられないんですからな」つて仰しやるのよ。御自分も山から歸つていらしつてから、人が變つたみたいに、急に若々しくおなりになつたわ。ああ、いろんなものが早く見たいわ、あなたと一緒にお山に登りたいわそれから、ペーテルや山羊たちもお友達になりたいわ、ほんたうに楽しみたいわ！

あたし、はじめの六週間は、ラガツ温泉で養

生しなきやならないの。これはお医者様の御命令よ。それからデルフリへ行つて、お天氣のいい日に椅子でお山へ連れてつてもらふの。そして、いちんちあなたと遊べるわね。おばあさまも、あなたに逢へるのを楽しみにしていらいつしやるわ。それからね、さても面白いところがあるよ。ロッテンマイアさんは、行かないのですつて、おばあさまが毎日のやうに、「スキス行きはさうしますね。もし行きなければ、遠慮なく仰しやいよ」さおたづねになるさ、その度に「御高配のほご重々ありがたうございますが、失禮させていただきます」なんて、さても畏まつてこころわるのよ。あたし、これさうしてだか知つてるの。セバスチャンが、お山のこころをさても怖ろしさうに話して脅かしたからなのよ。岩が危つかしく突き出てるで、一步踏みはづせば千仞の谷に落つこちるだの、坂が険しくて一足毎に割れ目にすべり込みそうだの、山羊でもなければ命の心配なしにあんな所を登れるものでないのださ話すので、ロッテンマイアさんはすつかり怖氣を震つて、それまでさても乗り氣だつたスキスに、急に熱がさめてしまつたの。

ティネットも震へ上つて、やつぱり行かないことに決めたわ。だから、おばあさまさあたしと二人つきりない。よセバスチャンがラガツ温泉まで送つて来るの。

ああ、待ちごほしいさ。では大好きなハイディちゃん、さようなら。おばあさまからもくれぐれもよろしくつて。

あなたの仲よしの

クララ

お手紙が終るさ、ペーテルはよりかかつてゐた柱から身を起し、ものすごい勢で鞭を振りまはしながら駆け出した。山羊たちがおびえて散り散りに逃げ出すさ、ペーテルは又もそれを追つて、脅かすやうに鞭を振り立てた。フランクフルトから又大勢お客さまが来るさいふので、むしやくしやしてたまらないのである。ハイディはうれしくてうれしくて、明日になったら早速おばあさんに、大好きなクララとおばあさまが来て、こわいロッテンマイアさんさティネットが来ないさ話を話してあげようさ、楽しみだつた。おばあさんにはしよつちうその人たちのお話をしてあげたから、みんなお馴染の人たちなので、きつさおばあさんが喜ぶだらうさ思つたからである。